

話題・親疎関係と「配慮」の関わり

ー現代大学生の言語意識調査に基づく「嘘」と「本音」ー

伊藤由希子

【キーワード】「嘘」と「本音」・話題・親疎・「利益」・「配慮」

1. はじめに

Brown & Levinson (1987: 115-116) がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして言及しているように、white lies⁽¹⁾としての嘘は、「円滑なコミュニケーション」に大きな役割を果たしている。場をわきまえた、相手を思いやったやさしい「嘘」なくしては、相手の心を傷つけ、相手との人間関係に悪影響を与える危険性は否めない。しかしながら、相手の気持ちを考慮し、嘘をつくことが常に「円滑なコミュニケーション」の達成のために有効だと言えるのであろうか。逆に、「本音」を発することは、単に相手への思いやりに欠けた行動と見なされるものなのだろうか。

本稿では、嘘や本音の出現に「話題」「相手との親疎関係」「相手との社会的関係」「相手の性別」「場の改まり」という5つの制約が影響するものと考え、大学生という若い世代で、特に関係が強いと認められた「話題」と「相手との親疎関係」について、表現主体がどのような意識によって嘘と本音を使い分けているのかを明らかにする。

2. 調査方法

2.1 テレビドラマのシナリオ分析

テレビドラマのシナリオ 30 本⁽²⁾から、相手の気持ちに配慮して嘘をつく場面を 42 例、嘘をつくという選択肢があるにも関わらず、あえて本音を伝える場面を 32 例収集した。そして、嘘をつく場面と本音と言う場面にどのような違いがあるのかを分析し、山梨(1988: 40)に示される4つの「文脈の類型」を参考に、嘘と本音の出現に関わる制約を抽出した。その結果、嘘と本音の出現には、①「話題」、②「相手との親疎関係」、③「相手との社会的関係」、④「相手の性別」、⑤「場の改まり」の5つの制約が関わるものとして導き出された。

2.2 アンケート調査

嘘と本音の使い分けの意識を調べるために、2005年6月から7月にかけて、大学生を対象としたアンケート調査を実施した。アンケートは、シナリオ分析に

よって抽出された①「話題」、②「相手との親疎関係」、③「相手との社会的関係」、④「相手の性別」、⑤「場の改まり」の5つの制約を考慮し、嘘か本音を迫られる10の状況設定を作成した。

アンケート全10問の状況設定を示す。

＜表1＞アンケート全10問の状況設定

設問	制約	①話題	②親疎	③社会的立場	④相手の性別	⑤場の改まり
問1		容姿	親	同等	同性	くだけた場
問2		作品	親	同等	同性	くだけた場
問3		作品	疎	同等	同性	くだけた場
問4		性格	親	同等	同性	くだけた場
問5		共感	親	同等	異性	くだけた場
問6		容姿	親	目上	男性	くだけた場
問7		断り	親	同等	同性	くだけた場
問8		作品	親	同等	同性	改まった場
問9		作品	疎	同等	異性	くだけた場
問10		共感	疎	同等	異性	くだけた場

注) 問6は、相手を目上の「先生」に設定したが、「先生」の性別は、回答者の判断に大きく関わらないと考えて、「相手の性別」は、「男性」に設定した。

各設問において、嘘をつくか本音を言うかという回答の選択肢を示し、理由とともに回答を求めた。その結果、18歳から23歳の大学生142名（男性63名・女性79名）の回答が得られた。

例として、アンケートの問2を以下に示す。

問2.

ある日、由美は高校時代から親しい友人の景子に会うことになりました。景子はイラストレーターを目指して勉強中。景子是由美に自分の作品を見せます。

景子「これが最近一番気に入ってるやつんだけど、どうかな？」

由美「ああ、これ？（…うーん、どうなんだろこれ。そんなにいいとは思わないけど…）」⁽³⁾

上記のようなやりとりを提示した上で、自分が由美なら景子に何と言うか、嘘であるA.「うん、いいんじゃない」と本音であるB.「うーん、そんなにいいとは思えないなあ」から回答を選択させ、いずれもあてはまらない場合は、C.「その他」として自由記述をさせた。回答理由についても、a.《景子の気持ちを害したくないから》、b.《本心を言ってやるのが景子のためだから》、c.《そのほうが会話がはずむから》、d.《景子と気まずくなりたくないから》、e.《嫌人と思われたくないから》、f.《景子にダメージを与えたいから》、g.《嘘をつく必要はないか

ら》、という選択肢を提示し、最も近い理由をひとつだけ選んでもらった。また、いずれもあてはまらない場合は、h.「その他」として自由記述を求めた。

2.3 分析方法

嘘と本音の出現が先に述べた5つの制約とどのように関わっているのか、すなわち、どのような状況において嘘や本音が現れやすいのか、表現主体の立場からの調査結果を分析する。例えば、「話題」との関連を見るためには、その他の制約が共通する問1、問2、問4、問7の比較を行う。その際は、回答理由の分析を通して、嘘や本音の出現が表現主体のどのような意識に基づくのかを考察する。

2.4 回答理由の位置づけ

嘘と本音がどのような意識から発せられるのかを明らかにするために、前述のように、アンケートでは、その回答理由も選択肢で示した。回答理由については、誰の「利益」となるのかという観点と、人間関係への「配慮」という観点から、その位置づけを行った。

2.4.1 利益による位置づけ

利益は嘘と本音の両方から生じるものと考えられる。利益による理由の位置づけを、以下のように、大きく、1.「利益あり」と2.「利益なし」に分け、さらに、「利益あり」を誰の利益を求めるのかという観点から、①「自己利益」②「相手利益」③「双方利益（相手と自分の双方の利益）」に分けた。

＜表2＞利益による理由の位置づけ

1.利益あり	①自己利益	d.《相手と気まずくなりたくないから》 e.《嫌な人と思われたくないから》 f.《相手にダメージを与えたいから》
	②相手利益	a.《相手の気持ちを害したくないから》 b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》
	③双方利益	c.《そのほうが会話がはずむから》
2.利益なし	—	g.《嘘をつく必要はないから》

①「自己利益」のd.《相手と気まずくなりたくないから》やe.《嫌な人と思われたくないから》も、②「他者利益」と位置づけたa.《相手の気持ちを害したくないから》も、「円滑なコミュニケーション」を目的とする以上、すべて「自己利益」を求めていると考えられるが、a.《相手の気持ちを害したくないから》をあくまで相手の不利益を避けるものとし、そこから生じるd.《相手と気まずくなりたくないから》やe.《嫌な人と思われたくないから》という自分を守ろうとするものを①「自己利益」として位置づける。

2.4.2 「配慮」による位置づけ

1.「嘘」と2.「本音」の両方を対象に、「配慮」という観点から<表3>のとおり理由を位置づける。1.「嘘」では、相手の気持ちへの配慮が強いものを①「配慮に積極的」、逆に低いものを②「配慮に消極的」とした。

また、本稿では「配慮」という用語を広くとらえている。嘘をつくことで相手の気持ちに配慮するといった意味だけでなく、利益とも絡めてとらえ、b.《本心と言ってやるのが相手のためだから》のように、自分の本音によって相手が実質的な利益を受けるということも相手への「配慮」に含め、③「配慮に積極的」と認める。さらに、嘘をつく、あるいは、本音を言うことで会話をはずませようとする意識も「配慮」に含める。つまり、人間関係をよりよいものにしようという意図を「配慮」として認めるということである。

＜表3＞「配慮」による理由の位置づけ

1.嘘	①配慮に積極的	a.《相手の気持ちを害したくないから》 d.《相手と気まづくなりたくないから》 e.《嫌な人と思われたくないから》 c.《そのほうが会話がはずむから》
	②配慮に消極的	「めんどくさいから」 「適当に流したいから」
2.本音	③配慮に積極的	b.《本心と言ってやるのが相手のためだから》 c.《そのほうが会話がはずむから》
	④配慮に消極的	f.《相手にダメージを与えたいから》 g.《嘘をつく必要はないから》

注)「i」内はf.「その他」として自由記述された理由の一例。

《》を付したものは選択肢として提示した理由である。<表2>についても同様。

3. 結果と考察

3.1 話題〔親の関係・同等・同性・くだけた場〕

会話における話題は、どのように嘘と本音の現れ方に関わるのだろうか。いずれもくだけた場での親しい同性の大学生同士という設定で、異なる話題が設定されている問1、問2、問4、問7⁽⁴⁾の4問の比較を通し、話題の違いがどのように嘘と本音の現れ方に影響するのかを考察する。

問1の話題は「容姿」で、相手が髪の毛の色を変えたことに対する感想を求められた際、相手に似合っていないと感じている場合、「似合っている」と嘘をつくか、本音を伝えるかの回答を求めた。

問2は、先に例として示したように、「作品」が話題で、イラストレーターを目指す相手のイラストを見せられ、感想を求められる。それがよいものだと思えない場合、嘘をついて評価するか、本音を伝えるかを問うものである。

問4の話題は「性格」であり、相手が相手自身の性格について「しっかりしていない」というマイナス面を話題にあげた際、それを否定する嘘をつくか、自分

もそう思っていると本音を言うか、回答を求めた。

最後の問7は、依頼への「断り」で、アルバイトを代わってほしいと依頼されたが、「めんどくさい」ために断りたいとき、都合が悪いと嘘をつくか、そのまま本音の理由を伝えるかを問うものである。依頼を断ることは、自分が行動することにより本来相手が得られるはずであった利益を失わせることになる（蒲谷他 1998）ため、あからさまに本音を言うことは考えにくい。問7の設定は、問1、問2、問4と異なり、相手への評価に関わるものではないが、嘘の現れがどのような制約と関連しているのか検討できると予想されるため、問1、問2、問4との比較を行いたい。

以上の回答結果を＜表4-1＞に示す。

＜表4-1＞話題における嘘と本音の回答結果

話題 \ 回答	嘘	本音	その他	無回答	計
問1「容姿」	60 42.3%	18 12.7%	64 45.1%	0 0.0%	142 100.0%
問2「作品」	47 33.1%	49 34.5%	46 32.4%	0 0.0%	142 100.0%
問4「性格」	42 29.6%	47 33.1%	53 37.3%	0 0.0%	142 100.0%
問7「断り」	123 86.6%	9 6.3%	9 6.3%	1 0.7%	142 100.0%

注) 上段の数字は実数、下段は全回答数に占める比率を表す。

以下、＜表6-1＞も同様。

嘘が本音を上回った設問は、問1「容姿」と問7「断り」であるが、特に問7「断り」では嘘が86.6%を占め、予想どおり嘘が現れやすい結果となった。問1「容姿」も嘘が42.3%、本音が12.7%であり、嘘が本音を上回っている。一方、問2「作品」、問4「性格」は本音が嘘をわずかに上回っている。

《その他》の自由記述で、嘘も本音も避けている回答は、「はぐらかし」として扱う。全10問における「はぐらかし」の平均値は21.4%であり、平均を上回る「はぐらかし」の回答が得られたのは、全10問中4問、すなわち問1〔容姿・親・同等・同性・くだけた場〕、問2〔作品・親・同等・同性・くだけた場〕、問4〔性格・親・同等・くだけた場〕、問6〔容姿・親・目上・句だけた場〕であった。このことから、「はぐらかし」の現れやすい要因は、親しい関係のくだけた場であると考えられる。また、話題に関しては、問1「容姿」、問2「作品」、問4「性格」に「はぐらかし」が現れやすく、問7「断り」にはほとんどなかった。

「はぐらかし」の内容を分析すると、大きく「本音寄りのはぐらかし」と「嘘寄りのはぐらかし」に二分される。「本音寄りのはぐらかし」とは、自分の本音を隠すことはせず、(問1)「お前は～色のほうが似合ってるよ」、(問2)「ここを

こう直すとよくなると思うんだけどな」のような「アドバイス」や、(問4)「夕子〔相手の名前〕はしっかりしてないところもあるけど、やればちゃんとできるんだから、めげずに頑張りなよ!」のような「励まし」である。一方、「嘘寄りのはぐらかし」は、あくまで自分の本音を隠すもので、(問1)「自分らしくていいんじゃない」、(問2)「へー、おもしろいね、頑張ってるすごいなあ」などの視点やことばを変えた「ほめ」、(問4)「みんな怒られるもんだって」のような「慰め」である。

さらに、「はぐらかし」の回答比率が高い設問において、「本音寄りのはぐらかし」が「嘘寄りのはぐらかし」を上回ることが確認された。このことから、嘘は避けたいが、率直に本音を言うのもためられる、といった場合に、「本音寄りのはぐらかし」という戦略が選択されやすいのではないかと考えられる。

〈表4-2〉に、各話題について、上位に挙げた回答理由を示す。

〈表4-2〉話題における回答理由

話題	嘘		本音	
問1「容姿」	a.《相手の気持ちを害したくないから》	34 54.0%	g.《嘘をつく必要はないから》	9 45.0%
	c.《そのほうが会話がはずむから》	8 12.8%	b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》	5 25.0%
問2「作品」	a.《相手の気持ちを害したくないから》	28 59.6%	b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》	35 70.0%
	c.《そのほうが会話がはずむから》	3 6.4%	g.《嘘をつく必要はないから》	10 20.0%
	d.《相手と気まづくなりたくないから》	1 2.1%	c.《そのほうが会話がはずむから》	1 2.0%
問4「性格」	a.《相手の気持ちを害したくないから》	50 43.5%	b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》	21 42.9%
	d.《相手と気まづくなりたくないから》	11 19.6%	g.《嘘をつく必要はないから》	18 36.7%
問7「断り」	d.《相手と気まづくなりたくないから》	31 24.4%	f.《はっきり思っていること言わないと今後も同じ要求をされるから》	4 44.4%
	g.《あきらめがつくだろうから》	25 19.7%	g.《あきらめがつくだろうから》	1 11.1%
	f.《はっきり思っていること言わないと今後も同じ要求をされるから》	24 18.9%	—	—

注) 上段は実数、下段は「嘘」と「本音」の各回答数から見た比率を表す。

以下、〈表6-2〉も同様。

嘘が本音を上回った問1「容姿」、問7「断り」の結果においては、問1「容姿」の嘘の理由で、a.《相手の気持ちを害したくないから》という「相手利益」を求

める「配慮に積極的」な理由が54.0%を占めるのに対し、本音の理由ではg.《嘘をつく必要はないから》という「利益なし」で「配慮に消極的」な理由が45.0%を占め、b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》の25.0%を上回る。

また、嘘が86.6%を占める問7「断り」では、嘘の理由は、d.《相手と気まづくなりたくないから》(24.4%)をはじめ、g.《あきらめがつくだろうから》(19.7%)、f.《はっきり思っていることを言わないと今後も同じ要求をされるから》(18.9%)のように、「自己利益」を求める「配慮に積極的」な理由が目立つ。このような嘘の現れやすい話題では、嘘の理由が「相手利益」かつ「配慮に積極的」であるのに対して、本音の理由には「利益なし」や「自己利益」が目立ち、配慮面でも「配慮に消極的」であることがわかる。

一方、問2「作品」や問4「性格」などの比較的本音の現れやすい話題においては、本音の理由として、b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》という「相手利益」かつ「配慮に積極的」な理由がg.《嘘をつく必要はないから》を上回る。特に、問4「性格」の本音の理由では、b.《本心を言ってやるのが相手のためだから》(70.0%)とg.《嘘をつく必要はないから》(20.0%)の大きな差が見られ、「本音を言うことは相手のためになる」という意識が高いことがうかがえる。

「聞き手（の興味、要求、利益）に気がつく、注意を向ける」ことはポジティブ・ボライトネスとされており（Brown & Levinson 1987: 103-104）、本音を言うことが相手のためになる、つまり、本音が「配慮」として認識されやすい話題に本音が現れやすいことが指摘できる。

しかし、問2「作品」における本音の理由のb.《本心を言ってやるのが相手のためになるから》(70.0%)とg.《嘘をつく必要はないから》(20.0%)の大きな差に対し、問4「性格」はそれぞれ42.9%と36.7%で、問2「作品」ほど差は見られなかった。こうした相違にも関わらず、問2「作品」と問4「性格」では、本音の回答比率にほとんど差異はなかった（問2「作品」34.5%、問4「性格」33.1%）。これは何に起因するのだろうか。問2「作品」と問4「性格」の理由を比較したところ、c.《そのほうが会話がはずむから》という理由に相違が確認された。

<表5>に、嘘と本音の両方に回答において、c.《そのほうが会話がはずむから》が回答理由として選択された比率を示した。

<表5>c.《そのほうが会話がはずむから》が理由全体に占める比率

話題	嘘	本音
問2「作品」	3(6.4%)	1(2.0%)
問4「性格」	3(6.5%)	7(14.4%)

注) 表中には、実数および()を付して「嘘」と「本音」の各回答数から見た比率を示した

問2「作品」、問4「性格」のいずれの話題も、c.《そのほうが会話がはずむから》は、嘘と本音の両方の理由として確認されるが、嘘の理由として選ばれた比率は、話題間に差異が見られない。一方、本音の理由としては、問2「作品」よりも問4「性格」のほうが比率が高い。

Brown & Levinson (1987: 124) は、ポジティブ・ポライトネスのひとつとして「冗談」を挙げている。本調査でも、問4「性格」でc.《そのほうが会話がはずむから》という「配慮」に基づく本音が多かったのは、若い大学生間では、「冗談」ふうに関相手の性格を否定し、一時的な対立関係を作り出すことが、会話の盛り上がりや、より親密な人間関係作りに貢献するためだと考えられる⁽⁵⁾。しかし、問2「作品」ではc.《そのほうが会話がはずむから》という理由で本音を選ばれるのは2.0%にすぎない。これは、各々の話題が持つ真剣さや切実さに関する認識の違いによるものではないかと考えられる。

「冗談」がポジティブ・ポライトネスとなり得るのは、背景知識や価値観の共有に基づいている(Brown & Levinson 1987: 124)。相手が懸命に取り組んでいる「作品」という話題に対して否定する本音を「冗談」のように発しても、それはただ人間関係の悪化を招き、「配慮」としては機能し得ない可能性が高いのではないかとと思われる。

大学英語教育学会中部支部待遇表現研究会(2000)には、現代の若者には堅苦しい敬語よりもくだけた表現で親しさを表現するほうが好まれることをはじめ、さまざまな視点から、若者のポジティブ・ポライトネス化が指摘されている。また、伊集院(2004: 16)も、従来の社会規範を省みると初対面場面ではデスマス体が基本状態とされるはずだが、実際の初対面の若者間でもっとも多用されていたのはダ体の言い切りであり、若者のポジティブ・ポライトネス化を追求している。

本調査でも、「相手の役に立とうとする」「会話をはずませる」ことで、相手とより親しくなろうとする意識に基づく本音が認められたのは、調査対象者が大学生であることが大きく関与するものと考えられ、若い世代のコミュニケーションには、適度な距離を図ることのみならず、相手との親しさを重視する姿がうかがえる。

このような嘘と本音の選択には、利益の問題が関わってくる。「配慮」に基づく本音を選択する場合も、表現主体は当然「配慮」としての嘘という選択肢も持ち合わせている。にも関わらず、あえて本音を選択するのは、そのほうが自分にとっての利益があるためだと考えられる。前述した4問すべてが親しい関係に設定されていたことにも関わるが、本音を言うほうが相手との関係をより親密なものにできるという人間関係を円滑にできるという利益、さらに、場合によっては、実質的な利益も受けることができる。例えば、問7「断り」では、嘘と本音の選択における利益の関わりが顕著に見られたといえよう。問7「断り」で嘘が本音

を大きく上回ったのは、「相手と気まずくならない」という人間関係における利益と「相手をあきらめさせることができる」という実質的な利益という2種の「自己利益」を追求した結果であった。

嘘か本音か。人間関係において、また実質的に考えて、その話題ではどちらが自分の利益となるのかにより、嘘か本音かの選択がなされているように思われる。このように、嘘をつくことが、相手の気持ちを傷つけないようにと心がけ、「円滑なコミュニケーション」を達成するための「配慮」に基づくことはもちろん、本音を言うことも、必ずしも相手への「配慮」に欠けたものというわけではない。

「相手の役に立とう」「会話をはずませよう」という相手との距離を縮めようとするもうひとつの意識が働くことも考えられ、これも「円滑なコミュニケーション」を達成するための重要な「配慮」として見なすことができる。

3.2 親疎〔作品・同等・同性・くだけた場〕

以上、話題という制約において「作品」と「性格」に比較的本音が現れやすいことを示し、特に「作品」において「本音が相手のためになる」という意識の強さによることを指摘したが、どんな相手に対しても、そうした意識は強く持たれるのであろうか。

そこで、「作品」を話題とし、相手との親疎関係のみが異なる問2と問3の比較を行う。いずれも、くだけた場において同性の大学生同士、相手の作品について会話をするという設定であるが、問2が相手が親しい友人で、問3が初対面の相手であるという点のみ異なる。問3は写真展で、初対面の相手に写真の感想を求められるという設定である⁽⁶⁾。

〈表6-1〉に問2「親の関係」と問3「疎の関係」の回答結果を示す。

〈表6-1〉親疎関係における嘘と本音の回答結果

人間関係 \ 回答	嘘	本音	その他	無回答	計
問2「親の関係」	47 33.1%	49 34.5%	46 32.4%	0 0.0%	142 100.0%
問3「疎の関係」	109 76.8%	12 8.5%	21 14.8%	0 0.0%	142 100.0%

「親の関係」では本音が嘘をわずかに上回るのに対し、「疎の関係」では嘘が76.8%を占める。これは、表現主体のどのような意識の違いによるものなのかを、回答理由から検討する。

〈表6-2〉は親疎関係の回答における主な理由を示したものである。

＜表6-2＞人間関係における回答理由

人間関係	嘘		本音	
	回答		回答	
問2「親」	a.《相手の気持ちを害し たくないから》	28 59.6%	b.《本心を書いてやるのが 相手のためだから》	35 70.0%
	c.《そのほうが会話がはず むから》	3 6.4%	g.《嘘をつく必要はないか ら》	10 20.0%
	d.《相手と気まづくなりたく ないから》	1 2.1%	c.《そのほうが会話がはず むから》	1 2.00%
問3「疎」	a.《相手の気持ちを害し たくないから》	48 42.9%	g.《嘘をつく必要はないか ら》	8 66.7%
	d.《相手と気まづくなりたく ないから》	18 16.1%	b.《本心を書いてやるのが 相手のためだから》	4 33.3%

「親の関係」と「疎の関係」の比較で注目したいのは、本音の理由の違いである。「親の関係」では、b.《本心を書いてやるのが相手のためだから》が70.0%を占めているのに対し、「疎の関係」では、g.《嘘をつく必要はないから》が66.7%を占め、大きな相違が認められる。つまり、「親の関係」では「相手の役に立とう」という「相手利益」の追求が見られるが、「疎の関係」での本音にはそのような意識は見られず、そうした意識の弱いことが嘘が本音を上回るという結果の一因となっている。さらに、嘘の理由の自由記述において、「相手の気分を害して気まづくなっても本心を伝えようと思うほど親しくないから」や「友人なら本音を言うかもしれないけど、そんなに親しくない人なら無理に相手を傷つけてまで本音を言う必要はないと思った」などがあり、表現主体の意識は「相手との親疎関係」によるところが大きく、相手によって何が「配慮」となるのか異なる。つまり、「親の関係」であれば、相手とより親しくなろうという「配慮」に基づく本音であり、「疎の関係」では嘘をつく必要はないという意識に基づいた「配慮」を欠く行動である可能性が高い。こうした「疎の関係」における「配慮」とは、相手の気分を害さないように嘘をつくことであると広く見なされていると考えられる。

4. おわりに

以上、大学生を対象とした調査から、嘘と本音の選択には、何が自分の「利益」につながり、何が「配慮」となるのかに関わるものが明らかになった。また、そうした「利益」や「配慮」は、絶対的なものではなく、「話題」や「相手との親疎関係」の制約によって動的にとらえられるものであることがわかった。より親密な関係を求めようとする若者間においては、「わきまえ」（井出 2006）のほかにも、あえて「わきまえ」から逸脱することに対する価値観の共有がうかがえる。本調査からは、こうした相手との親密感を強く求める若者間のコミ

コミュニケーションにおいては、本音を言う選択は、「円滑なコミュニケーション」の達成を目指す上で必ずしも「配慮」に欠けた行動になるわけではないことが指摘される。しかしながら、相手と親しくない場合は、依然として嘘をつくことが相手に対する「配慮」として広く見なされており、「円滑なコミュニケーション」のために必要不可欠といってよいだろう。このことから、「円滑なコミュニケーション」は固定的なものではなく、人間関係や何が話題となるかといった制約によって変動する動的なものであることがうかがえる。

なお、嘘でも本音でもない「はぐらかし」の回答率の高さは看過できないものであり、今後の検討が必要である。逆の立場になった場合、どのような返答を望むかという理解主体の意識と表現主体の意識との比較も興味深いものであるが、いずれも今後の課題としたい。

【注】

- (1) 罪〔悪意〕のない嘘（『カレッジライトハウス英和辞典』初版 1996 研究社）
- (2) 『テレビドラマ代表作選集』（日本脚本家連盟 1999～2004）から 12 本、その他、2000 年から 2005 年放送のテレビドラマから 18 本を使用。
- (3) 本稿で提示したものは女性用。男性へは名前を男性名に変えたものを配布した。なお、（ ）内は、心内表現を表す。以下、（4）（6）も同様。
- (4) アンケートの問 2 以外の 4 つの設問は、以下のとおりである。アンケート調査は、全 10 問について、表現主体の立場だけでなく、理解主体の立場からも調査を行ったが、本稿では表現主体からの調査のみ扱う。

問 1

弥生がある朝授業にやってくると、親しい友人の玲子の髪の色が変わっていました。いわゆるイメチェンです。

弥生「おはよう（あー、髪の色変えてる…。だけど似合ってないなあ）」

玲子「おはよ。髪の色変えてみたんだけど、どうかなあ？」

【あなたが由美なら、景子に何と言いますか？より近いものに○をしてください。】

- A. 「いいんじゃない、似合ってるよ」
- B. 「うーん、あんまり似合ってるとは思えないかなあ」
- C. その他（記述）

【それはなぜですか？一番近いものをひとつ教えてください。】

a. 玲子の気持ちを害したくないから。b. 本心を言ってやるのが玲子のためだから。c. そのほうが会話がはずむから。d. 玲子と気まづくなりたくないから。e. 嫌な人と思われたくないから。f. 玲子にダメージを与えたいから。g. 嘘をつく必要はないから。h. その他（記述）

問 4

和江はサークルで親しい夕子からアルバイトの話をされました。

タ子「昨日、またバイトで怒られちゃったよ。私ってやっぱりしっかりしてないもんなあ」
和江「……（確かにしっかりしてない子だよなー、タ子って）」

【あなたが和江なら、タ子に何と言いますか？より近いものに○をしてください。】

- A. 「そんなことないって。しっかりしてるよ」
- B. 「そうだよなあ、確かにタ子ってしっかりしてないよね」
- C. その他（記述）

【それはなぜですか？一番近いものをひとつ教えてください。】

- a. タ子の気持ちを害したくないから。b. 本心を書いてやるのがタ子のためだから。c. そのほうが会話がはずむから。d. タ子と気まづくなりたくないから。e. 嫌な人と思われたくないから。f. タ子にダメージを与えたいから。g. 嘘をつく必要はないから。h. その他（記述）

問7

ある日、寛子のところにバイト先で親しくしている加奈から電話がかかってきました。

加奈「明日のバイトなんだけど、急に都合悪くなっちゃったんだ。悪いんだけど、代わってもらえないかなあ」

寛子「明日？（えーっ、暇だけど、面倒くさくて嫌だなあ）」

【あなたが寛子なら、加奈に何と断りますか？より近いものに○をしてください。】

- A. 「明日かあ、ごめん、予定があるんだ」
- B. 「うーん、暇だけど…。ごめん、他あたってよ」
- C. その他（記述）

【それはなぜですか？一番近いものをひとつ教えてください。】

- a. 加奈の気持ちを害したくないから。b. 本心を書いてやるのが加奈のためだから。c. そのほうが会話がはずむから。d. 加奈と気まづくなりたくないから。e. 嫌な人と思われたくないから。f. はっきり思っていることを言わないと今後も加奈に同じ要求をされるから。g. あきらめがつくだろうから。h. 嘘をつく必要はないから。i. 加奈にダメージを与えないから。j. その他（記述）

（5）大津（2004）は、「遊び」としての対立関係を作り出し、言い合いをする場面に着目し、一時的な対立行動が親密な関係間でどのように実現されているのかを分析している。

（6）アンケートの問3の内容は、以下のとおりである。

問3

ある日、典子は大学で写真サークルの展示会を見つけ、中に入ってみることにしました。一枚の写真の前で、典子は女子学生に声をかけられます。

女子学生「こんにちは、今日はありがとうございます。この写真、私が撮ったんです。どうですか？」

典子 「あ、これ。そうですか…（なんかつまらない写真だな。あんまり好きじゃない…）」

【あなたが典子なら、この女子学生に何と言いますか？より近いものに○をしてください。】

A. 「いいと思いますよ」

B. 「ちょっとつまらないかも。ごめんなさい、あんまり好きじゃないです」

C. その他（記述）

【それはなぜですか？一番近いものをひとつ教えてください。】

a. 相手の気持ちを害したくないから。b. 本心を言ってやるのが相手のためだから。c. そのほうが会話がはずむから。d. 相手と気まづくなりたくないから。e. 嫌な人と思われたくないから。f. 相手にダメージを与えたいから。g. 嘘をつく必要はないから。h. その他（記述）

【参考文献】

- 伊集院郁子（2004）「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語話者と接触場面の相違—」『社会言語科学』6-2 pp.12-26 社会言語科学会
- 井出祥子（2006）『わきまへの語用論』大修館書店
- 宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理想構想」国立国語研究所編『第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書 談話のポライトネス』pp.9-58 凡人社
- 大津友美（2004）「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—「遊び」としての対立行動に注目して—」『社会言語科学』6-2 pp.44-53 社会言語科学会
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店
- 大学英語教育研究会中部支部待遇表現研究会（2000）『現代若者ことばの潮流—距離をおかない若者たち—』大学英語教育研究会中部支部待遇表現研究会
- 難波康治（1998）「「うそ」という行為の分析に関する一試論」『千葉大学人文研究』26号 pp.37-56 千葉大学人文学部
- 橋本良明（2001）「配慮と効率—ポライトネス理論とグライスの接点」『月刊言語』30-12 pp.44-51 大修館書店
- 宮田聖子（2000）「ポライトネスを日本語にあてはめる」『東京大学留学生センター紀要』第10号 pp.87-101 東京大学留学生センター
- 山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会
- 吉村公宏（1995）『認知意味論の方法—経験と動機の言語学』人文書院
- Brown & Levinson（1987）*Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.